

益々充実へ

西洋絵画コレクション

20世紀美術の祖とも称せられるポール・セザンヌは、幾何学的で堅牢な構成で、世界の幾多の後進に多大な影響を与えた。縁あって『妻藁帽子をかぶった子供』を初公開として、20周年記念の名作展を飾ることが出来た。塗り残した部分も表現となっている誠にセザンヌならではの晩年の優品である。

これでセザンヌを中心近代西洋絵画史を概観出来るコレクションになった。先ず印象派のエドワード・マネ『黒い帽子のマルタ夫人』は、パステル画の肌がまるで白粉をはいたような表現で、化粧品会社を母体とする美術館の所蔵にふさわしい。クロード・モネ『チャーリング・クロス橋』は朝の光に包まれた印象派らしい作。オーギュスト・ルノワール『横顔の少女』、後期印象派のセザンヌとフィンセント・ファン・ゴッホ、新印象派のジョルジュ・スーラと捕つた。次に、

フォーヴのアンリ・マティス『ヴェールをかぶった女』は平面的な薄塗りだが眼と唇に存感があり、マネと並んで当館の所蔵にふさわしい)、アンドレ・ドラン、モーリス・ド・ヴラマンク、キュビズムを創始したパブロ・ピカソ、ジョルジユ・プラック、フェルナン・レジエなど多彩。抽象派のワシリイ・カンドИНスキイ、パウル・クレー、ジョアン・ミロ。更には、ナビ派のピエール・ボナール、エドワード・ヴュイヤールなどと充実した内容となつた。

貴重視される作品に触れると、ギュスター・モロー『サロメの舞踏』は小品だが、巡回した「モロー展」の中でも光っていた。コ

ングボーリーは、前衛彫刻家の珍しいテンペラ画。ジョルジオ・モランディは、終生アトリエで瓶や水差しなどを描き続けた。『静物』の静謐さは、近年益々評価が高い。ニコラ・ド・スター『黄色い背景の静物』(ロシアからパリにて命の天才画家)などであろうか。ここ10年程の間に、哀愁の少女像のジュリー・パスキン、モンマルトルの風俗を表出したヴァン・ドンゲン、ベルギーのルネ・マグリット『星座』、ポール・デルヴォー『捧げもの』、又アンソールより先輩のフェルナン・クノップフの小品『婦人像』、ナビ派の理論を立てたモーリス・ドニ『ダンス』、更にクリムトの弟子の異端画家エゴン・シーレ『緑の袖の子ども』(アントン・ペシュカ・ジュニア)》が加わって益々コレクションに幅が出て来た。

コレクションの画集は開館記念図録に始まり、10周年・20周年記念に編まれたのを見れば、コレクションが徐々に増えて来たことがわかる。30周年にはどんな画集になるか楽しみに待つて戴きたい所である。

(元メナード美術館顧問)



ポール・セザンヌ
『妻藁帽子をかぶった子供』
1896～1902頃

メナード美術館開館25周年記念
コレクション名作展Ⅳ 西洋美術

7 / 11 ~ 10 / 6